法輪寺

法輪寺の創建の年代ははっきりしていないが、基礎的な物語が 2 つ存在している。ひとつは、山背大兄王（643 年没）とその息子の由義王が、山背大兄王の父親である聖徳太子（574〜622 年）の病からの回復を祈るためにこの寺を建てた、とするもの。聖徳太子は日本の建国の歴史における重要な政治家で、622 年に病に襲われた。もうひとつの物語は、僧の圓明と開法師、下氷新物（朝鮮の百済王国からやってきた）の 3 人が集まって、法輪寺をつくった、というものである。
三井寺という別名を持つ法輪寺は、7 世紀に完成した当時は現在よりも規模の大きな寺であった。13 世紀ごろから衰退が始まり、1645 年には台風によって伽藍の建物がほとんどすべて破壊されたが、三重塔だけが残り、その後も 3 世紀にわたってそのままの姿で立ち続けている。法輪寺は 18 世紀に再興され、本堂と講堂が再建された。今日、法輪寺には、重要文化財に指定されている十一面観音像をはじめ、数多くの宝物が収められている。